「キリストに在って生きる」

ガラテヤの信徒への手紙３章１－７節

森島 牧人 牧師

先週、私は「日本バプテスト同盟海外伝道協会」の働きのためタイへ行き、チェンマイにあるカレン族のバプテスト事務所を中心に仕事をし、近くの「シロアム神学校」・「アメリカンバプテスト海外伝道協会」・「チェンマイ日本語教室」・「チェンマイ日本語教会」などを訪問しました。

タイは人口の９０％以上が仏教徒という国で、欧米での教会のように町の角々にお寺があり、そこで人々が修行をしていました。そういう意味ではタイはミャンマー（ビルマ）と同じように、まさに仏教国と言えますが、もちろんタイでも憲法で＜信教の自由＞が保障されていますので、他の宗教も存在しています。少数民族に多いキリスト教徒は人口の０．６％（日本は人口の１％）、イスラム教徒は５％で、その他ヒンズー教徒なども存在しています。

タイにはキリスト教徒の多いカレン族の他にもいくつもの少数民族がいて、アカ族もその一つです。アカ族は、中国の雲南省を出てビルマを通過し、タイに入ったとの研究結果があるのに対し、カレン族は、中国から出たとは思われますが、アカ族のように直接にビルマを通過してタイに入ったのではなく、どこかを回った後タイに至ったようで、その途中のどこかでキリスト教に出会ったのではと言われています。少数民族の中では最も大きく、キリスト教徒の多いカレン族が、どうしてアニミズムからキリスト教徒になったのか、どこでキリスト教に出会ったのかを考えていて、私はかつてカレン族の人々から彼らの神話を聞いたことを思い出しました。

それは「その昔、神様によって異なる民族が作られた。彼らはみんな兄弟であった。我々カレン族はその中の長子で、他の民族から尊敬されていた。ある時、それぞれの民族は神様から大切な一つの書物をいただいた。ところがあろうことか、我々はその書物を失くしてしまい、その結果、貧しい暮らしをすることになってしまった。しかし、いつか若く白い兄弟が海を越えてやって来て、我々にその書物をもう一度もたらしてくれる。」というものでした。

この種の神話研究は慎重に進められていると思いますが、この話から私は、1886 年ビルマがイギリスによって植民地化され、聖書を携えてビルマに入った多くの宣教師が仏教徒の多い平地を避けて、山間部の少数民族に宣教したであろうこと、またビルマ族の圧政に苦しんでいたビルマの少数民族（特にカレン族）は、その宣教師の姿を神話と重ねて捉え、多くの人々がキリスト教を受け止めたのでないかと思いました。

さて、今日２月の第一主日は＜バプテスト・デイ＞と定められています。現在私が会長の任にあります「日本バプテスト海外伝道協会」は、これまで多くの欧米のバプテスト派により支えてきた私たちだが、いまやこれまで頂いてきたその支援を「Pay it Forward」（単なるお返しではなく、次へ渡そう）の意識を＜信仰的にもって＞、つまり、ただ頂く者に留まるのではなく、アジアのバプテスト諸教会と協働し、主にある兄弟姉妹への福音宣教のために、私たちも用いられて行きたいとの思いに至ったのです。＜頂くだけの者＞から＜共に＞外の国々への伝道を目的して作られた集まりなのです。

ところでプロテスタント教会の一つである私たちバプテスト派とはどのようなグループなのでしょうか。１６世紀、ルターの宗教改革によって、プロテスタント教会が誕生しました。同じ頃、強固なカトリック国であったイギリスでは、王ヘンリーが自身の離婚を可能にするためカトリックから離脱、英国国教会を作ります。その時、プロテスタントへの移行は良いが、それは宗教としてもっと＜pure＞なものであるべきだと考え、王に抵抗した人々がいました。それがピューリタンで、しかし結局彼らはイギリスを出てオランダやアメリカに行くことになります。そのような中に誕生したのがバプテスト派でした。従ってアメリカにはバプテスト派が多いのですが、１８７３年、ネイサン・ブラウンとジョナサン・ゴーブルというバプテスト派の二組の宣教師のカップルがアメリカから日本に派遣され、その働きによって日本で二番目のプロテスタントの教会(現在の横浜教会)が立てられることになりました。

１９４１年、戦時下にあった日本政府は、いくつもの教派に分かれていたプロテスタント教会を一つの団体にするよう要請、それを受けて「日本基督教団」が作られ、バプテスト教会もそこに加わりました。しかし１９５８年、バプテスト派の一部が、日本基督教団を離脱して「日本バプテスト同盟」を創設、現在に至っています。「私たちの救い主は主イエス・キリスト」という全教派共通の基盤のもと、バプテスト派の特徴的な考え方は　①個人の意志を尊重する　②一つ一つの教会が自立している　③信徒はすべて平等である　などで非常に民主的な考えを持っている教会と言えます。

かつて私たちバプテスト派の教会も、長く欧米の宣教師や人々の献金に支えられて来ました。今度はそのお返しとして、助けを必要としているアジアのバプテスト派の教会を支えなければなりません。そしてそれはさらに協働的という関係へと進む必要があります。つまり、宣教師を送るだけではなく、向こうからの宣教師を受け入れ、共に皆で福音を伝えて行くのです。皆さまにも、共にそれに具体的に関わって行きたいと願っています。

（説教要約　羽入田悦子）